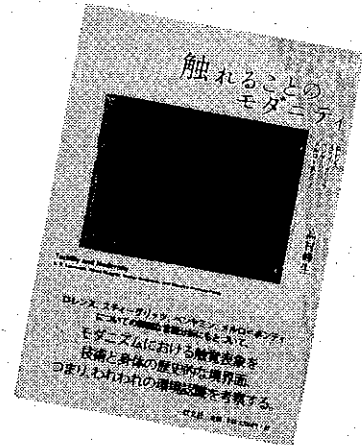


向井輝生 著
▶ 触れることのモダニティ
ロレンス、ステイーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ
2・27刊 A5判318頁 本体3200円
以文社

「我に触れるな」の禁令に対峙する、 美的現代性の桎梏

視覚性から触覚性への転回へ

稲賀繁美



ノリ・メ・タンゲル「我に触れるな」は復活したイエスの身体に触れようとしたマリアのミリアに対して発した言葉として知られる。この文句を何冊か作品に引用しているロレンスは、フアン・グセの丘陵、ハイエン・グセの「最晩年の『エトルリアの故地』(Etruria)を残す。ムッソリーニが「握手の儀行的」この理由で導入した「ローマ式敬礼は、実際にはラッパ新古典派の画家アウグストの《ホルテウス三兄弟の誓い》に由来し、タヌンチオ脚本の叙事詩映画《カピリマ》(1914)などで普及したとどう。ロレンスはこのムッソリスト党の「接触感」は対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテリコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画でも見出す。画家の「リン・性」(liveness)の追求は当時の通念から「不潔」で「不道徳」との批判を招く。そうした「潔癖性」の触覚感(清浄)「偽」を訴

えるのが、noli me tangereの禁令を破りうやむやのロレンスの生命の「倫理」だった。手仕事 Handwerk の残す痕跡は触覚と無縁ながら、ヴァルター・ベンヤミンによって、経験の伝達(触れる)「Zwanger」(存する)。そのハイエン・グセは写真と映画とで複製技術が作りの手を開放した一方で、タヌンチオや映画に代表されるメリアは作品を鑑賞者に接近させる限りの「触覚的」(taktilisch)と限定されたこの語は通洋語に「戦術的」の意味。その主張する著者は、ベンヤミンへのアロニス・リーガルやルトウィット・クラウケスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型 Urform のと現像(触覚)をなすクリエーションの説き、故郷への憧憬が詩の韻にその触覚的に体感されることと、ベンヤミンの議論に重ね合わせる。日本では折口信夫の「憧憬」論が三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根拠 Ursprung に触れる

タブー、根拠からの疎外が均質な時間としての歴史」として「欺瞞の生成 Entstehung」を表裏をなすという認識がある。「元来アウラ」は息吹(吹く)も均質な時間(支配)の「普遍性」はアウラの風(吹く)も殺して、機械的な複製複製 Abbild を量産する。ロレンスのフアン・グセの批判と平仄を合わせ、ナチス政権の訴える「非常時」とは、接触を奪奪する統制を手段として絶対権威の掌握・貫徹なのである。

そのベンヤミンの「翻訳者の使命」は、日の接続と「日」が語られる。原作と「日」翻訳が接するのは無限小の接続(おける)は、一瞬の出来事、「ちんちん」も去る「接触」(Flüchtigster Berührung)は「瞬間」(瞬間)「吹き飛ばされた」(後述)しながら過去の屍體へと視線を投げる。かのパウエル・クレーの作品から靈感を得た「新しい天使」の姿も重なっている。Bataillon が能動態の「触れる」(berühren)は受動態(触れる)の中動態の「触れる」に相当する。ドイツ語に於いてはハイネカーに「日本語」(日本)は「根拠」の志向は生成と消滅(か)の発生(す)「触れる」(Berührung)の翻訳論には、私見ではカプラーの下地を無視(触れる)。「触れる」は根拠

における破砕が残した空隙であり、それを残された破片によって後付けの埋め戻して修復(す)とする営みが翻訳による救済作業にほかならない。それは定義からして「死後の生」を求め(営む)も、その「絶えざる回答」の裡に「か」。根拠は生成の川のなびた渦(す)である。生成の材料を自らの律動(か)に巻き込んで「す」のか。このイメーシ Bild はまた、水も知識が説く瀑布に落ちる水流を思わせる。滝の水音は永遠に更新される瞬間だが、それは翻訳の営みにあっては、アウラの風(吹く)も鳴る

風琴と化する。翻訳は交通 Verkehr だが、交通は比喩 metaphor の語源でもある。生々流転はクラウケスがヘラクリトスから引用する万物流転(も)あり、時の後先を捻転する anachronism は「比喩」として「時間転生」に接して「翻訳」(訳)……。英文博士論文の和訳に基づく著作の第二章と第三章に於いて私見を述べた。ステイーグリッツとその周辺を分析する第二章は、「接触」の比喩の奔流に身を投げる。またモーリス・メルロー・ポンティのキヌス・カスマを扱う最終章は、接点(生)の受動と能動の蝶番 charnière と裂開 (scar) を軸に「創作」における時間性の実現 (realisation) をセザンヌとフルーストに接して展開する。過去の偶発的な触覚的遭遇 (contingence) の議論は、さらに丸鬼周造などを触媒にする可能性をも秘めている。英語圏の研究事情に強い著者が、この先日本の事例にも触れつつ、さらなる様々な接触(触角)を伸ば(れ)たいとを期待したい。(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学)